

川添 愛 (言語学)

## 動詞・項名詞句の意味合成と文構造

本論文は、日本語に特徴的な構文を詳細に研究することにより、日本語の文構造についての新たな知見を提示し、「文」というものの統語的条件と意味的条件を今までにない視点から解明しようとしたものである。

特に議論の中心になっているのは、(1)のような等位接続構文である。

(1) [主語 目的語]と[主語 目的語] 動詞

例：[太郎がリンゴを3つ]と[次郎がミカンを2つ]買う

従来の研究では、(2)のように目的語が必ず動詞と構成素を成すと考えられていたため、(1)のような等位接続が可能であることそのものが大きな問題を呈する。

(2) [主語 [目的語 動詞]] 例： [太郎が [本を 買う]]

(1)の現象についてこれまでに提案されている分析はどれも、(2)の文構造を仮定したまま(1)が派生できるように特別な操作を提案しているが、本論文の第2章から第4章では、それらの分析がいずれも誤った予測を生み出すことを示し、結果として、動詞と名詞句は常に(2)のような構造関係にあるわけではなく、(3)のような構造関係になる場合もあるということを主張した。

(3) [[主語 目的語] 動詞] 例： [[太郎が 本を] 買う]

このような構造を仮定することによってはじめて説明ができる構文がほかにも種々あることが第6章でも指摘されている。

(3)のような構造では、従来のような方法で文の意味を合成することができないが、本論文の第5章では、主語や目的語などのいわゆる項を、動詞に対する修飾語であると考え、新しい意味解釈の方策を提案した。この方策は、英語の項に対しては適用されないと考える必要があるが、本論文では、その違いを格助詞の有無によると位置づけている。

以上のように、本論文は、文の構築方法について新しい可能性をもつ理論を提案する、きわめて斬新で広範囲の影響をもちうる研究である。特に注目されるのは、単に理論的可能性として(3)の構造を提案したのではなく、この文構造を仮定しなければ説明できない事実があることを示した点である。本論文の前半で取り上げられているのは、もっぱら(1)の構文であり、これそのものは比較的特殊な構文であるが、この構文に集中することにより、候補となりうる分析を緻密な方法で比較検討し、(3)の構造を仮定する必要があるということを説得的に示すことが可能になった。また、第5章で導入されている意味論は、日本語学において古くから指摘されてきた直観を形式的に捉え直したものとみなすこともでき、また、哲学・論理学の分野での知見を統語論の成果と融合させる試みという側面も持っている。このように、本論文は、広い視点から統語論・意味論に重要な貢献をしたものと高く評価できる。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士(文学)の学位を授与されるに十分であることを認める。